

太宰治「舌切雀」論

——戦争協力のあり方——

申 舌 禾

はじめに

『お伽草紙』の最後の作品である「舌切雀」は、従来二つの論点から論じられてきた。一つは冒頭部分の「桃太郎」の執筆放棄の問題である。『お伽草紙』が書かれたのが戦争の最末期であることから、執筆放棄は当時の「近代の超克」や「日本回帰」などの時代的な風潮と関係づけて論じられてきた。この時代は、昭和十二年頃から盛んになった日本回帰の思想がいよいよ高揚し、西洋文化に対する日本文化の価値の優位が妄信的に語られ、敵性語が禁止され、「大和魂」、「撃ちてし止まむ」などの勇ましい言葉が飛び交うようになっていた。太宰治は日本文学報国会、及び情報局からの委嘱を受けて『惜別』を書いていたこともあり、『お伽草紙』についても、当時の時代的な風潮と関係があるのかどうか、という議

論がされてきたのである。たとえば、安田義明は「舌切雀」について、「昔話「桃太郎」が内包する侵略構造の日常レベルへの焼き直しである」と述べ、戦争協力的な作品と捉えている。一方、越智良二は「表面的な「日本一」の懲罰にも拘らず、当時の国粹主義、軍国主義に対する批判が籠められていると見てよいであろう」と述べている。論としては、越智のような時局を批判したという方が多数である。

もう一つは、お爺さんが宰相まで出世したという結末についてである。「舌切雀」は前の三つの作品とは違い、昔話にはない終わり方をしているため、その結末をめぐって多様な解釈が行われている。たとえば、巖大漢は、「本当のこと」としか言わないというお爺さんの態度がお婆さんを死に至らせる結果を招いたとし、「本当のこと」にも問題点があることを痛感させられ、「その結果、

「沈黙」を守っていたそれまでの生活を見直し、言葉を巧みに用いながら積極的に世と向き合う生き方を選ぶこととなったのである」と述べている。また、安田義明は「このへお爺さん③のうさん臭さは、「舌切雀」が前三話の遵守した普話的世界からはみ出したことを意味する」と言い、「結びで、しかも、唯一付加した後日譚でそれを決定的にしている」と述べ、『お伽草紙』の主眼は、もはや、前三話のような普話が成立し得ないことを反語的に問い掛けることにある④と述べている。また、高田知波は「物語を一切提示しないという入り組んだ語りの構造は、因果関係の定立の上に成立する物語の恣意性に対する痛烈な反措定になっている」と述べている。このように結末の部分については、作品の中で解釈しようとする論と、『お伽草紙』を俯瞰して作品全体の意味を探索しようとする論に分けられる。

ここでは、「舌切雀」の二つの論点を踏まえながら、『お伽草紙』と日本回帰の風潮との関係を論じていきたい。

一 お爺さんの変化

「舌切雀」の中で一番重要なのは、主人公であるお爺さんの「消極性」から「積極性」への変化であると思われる。まず、その変化を追ってみよう。

この舌切雀の主人公は、日本一どころか、逆に、日本で一ばん駄目な男と言つてよいかも知れぬ。だいち、からだが弱い。からだの弱い男といふものは、足の悪い馬よりも、もつと世間的の価値が低いやうである。(略)からだが弱いのは事実のやうであるが、しかし、寝てゐるほどの病人では無いのだから、何か一つくらゐ積極的仕事の出来ぬわけではない筈である。けれども、このお爺さんは何もしない。本だけはずいぶんたくさん読んでゐるやうだが、読み次第わすれて行くのか、自分の読んだ事を人に語つて知らせるといふわけでもない。ただ、ぼんやりしてゐる。これだけでも、既に世間的価値がゼロに近いのに、さらにこのお爺さんには子供が無い。結婚してもう十年以上にもなるのだが、未だ世継が無いのである。これでもう完全に彼は、世間人としての義務を何一つ果してゐない、といふ事になる。

お爺さんは、身体は弱い、病人という程でもないのに、積極的な仕事を一つもしようとはしない役立たずに設定されている。ちなみに、「子供が無い」ことが「世間人としての義務」を果たしていないとなるのは、昭和十六年一月に閣議決定された「人口政策確立要綱」が意

識されてのことだろうか。「産めよ、殖やせよ」というスローガンの時代である。

このお爺さんは、お婆さんが話しかけてもいつもひどく低い声で答え、「日常の会話に於いてさへ、はつきり言ふ手数を省いて、後半を口の中でむにやむにや言つてすますとは、その骨惜しみと言はうか何と言はうか、とにかくその消極性は言語に絶するものがあるやうに思はれる」。——このようにお爺さんは行動だけでなく、言葉さえ積極性を持っていない人物として描かれている。

しかも自ら「世捨人」のような生活をしている。お爺さんは元々「結構な身分」であり、親と親戚の仕送りがあるからこそ、「世捨人」のような生活ができるのであるが、お爺さんはそれには気づいていない。

ある朝、このお爺さんを辛辣に批判する雀が登場する。お爺さんは「庭の土の上に、脚をくじいて仰向にあがいてゐる」小雀を見つけ、餌を与えた。雀は脚の怪我が治っても、お爺さんの部屋で遊んでいたが、お爺さんは「全然無関心の様子」で、「黙つてお勝手から餌を一握り」縁側に撒いてやり、「少しも表情を変へず、黙つて雀を見てゐる」のである。お爺さんはお婆さんの「洗濯をするために生まれて来たのではない」という言葉を思い出し、「まだ、色気があると見える」と独言し、世間欲を批判する。すると突然、雀は「あなたは、どうな

の？」と言ひ出す。

「おれか、おれは、さうさな、本当の事を言ふために生れて来た。」

「でも、あなたは何も言ひやしないぢやないの。」

「世の中の人は皆、嘘つきだから、話を交すのがいやになつたのさ。みんな、嘘ばつかりついでゐる。」

さうしてさらに恐ろしい事は、その自分の嘘にご自身お氣附きになつてゐない。」

「それは怠け者の言ひのがれよ。ちよつと学問なんかすると、誰でもそんな工合に横着な氣取り方をしてみたくなるものらしいのね。あなたは、なんにもしてやしないぢやないの。寝てゐて人を起こすなかれ、といふ諺があつたわよ。人の事など言へるがらぢや無いわ。」

(略)

「しかし、おれのやうな男もあつていいのだ。おれは何もしてゐないやうに見えるだらうが、まんざらさうでもない。おれでなくちや出来ない事もある。おれの生きてゐる間、おれの真価の發揮できる時機が来るかどうかわからぬが、しかし、その時が来たら、おれだつて大いに働く。その時までには、まあ、沈黙して、読書だ。」

お爺さんは自分が「世捨人」として生きていくのは、嘘をついたり、他人の悪口を言ったりする人たちが怖いからだと言うが、このような人間嫌いの姿は「浦島さん」の、批評ばかりしている人間の世界を疎ましく思った浦島に似ている。お婆さんに「他の夫婦をごらんさない。どんなに貧乏をしてゐても、夕食の時などには楽しさうに世間話をして笑ひ合つてゐるぢやありませんか」「ただ、時たま、あなたから優しい言葉の一つも掛けてもらへたら、私はそれで満足なのですよ」と言われると、お爺さんは次のように答える。

「おれをこんな無口な男にさせたのは、お前です。夕食の時の世間話なんて、たいていは近所の人の品評ぢやないか。悪口ぢやないか。それも、れいの安易な気分本位で、やたらと人の陰口をきく。おれはいままで、お前が人をほめたのを聞いた事がない。おれだつて、弱い心を持つてゐる。お前にまきこまれて、つい人の品評をしたくなる。おれには、それがこはいのだ。だから、もう誰とも口をきくまいと思つた。お前たちには、ひとの悪いところばかり眼について、自分自身のおそろしさにまるで気がついてゐないのだからな。おれは、ひとがこはい。」

お爺さんの「世捨人」の生き方は、このような理由から生まれたものであるが、しかし、お爺さんの傍で世話を受け持つお婆さんを離れて過ごすことはできない。お爺さんにとってお婆さんは唯一の他人であり、世間と言つてもいい存在なのである。雀は、このお爺さんの言い訳を聞いて、次のように非難する。

「意気地無し陰弁慶に限つて、よくそんな負け惜しみの気焰を挙げるものだわ。廃残の御隠居、とでもいふのかしら、あなたのやうなよぼよぼの御老体は、かへらぬ昔の夢を、未来の希望と置きかへて、さうしてご自身を慰めてゐるんだわ。お気の毒みたいなものよ。そんなのは気焰にさへなつてやしない。変態の愚癡よ。だつて、あなたは、何もいい事をしてやしないんだもの。」

こう言われたお爺さんは、自分は「無慾」を「立派に実行してゐる」と言うが、もちろん、負け惜しみである。このような消極的なお爺さんが積極的な行動に出たのは、雀がお婆さんに舌を切られ、行方不明になった時であった。その翌日からお爺さんの雀探しが始まる。それまで極端に消極的だったお爺さんは舌切雀を「何かに憑

かれたみたいに」、「異様な熱心さを以て」探し廻るのであるが、このような「がむしやらの情熱」は、お爺さんにとって生まれて初めての経験であった。作者は「お爺さんの胸中に眠らされてゐた何物かが、この時はじめて頭をもたげた」と言うが、それは今までなかった雀に対する関心であり、生まれてはじめての他人に対する強い関心でもある。このお爺さんの変化の原因について、作者は次のように語っている。

自分の家にあるながら、他人の家にいるやうな浮かない気分になつてゐるひとが、ふつと自分の一ばん気楽な性格に遭ひ、之を追ひ求める、恋、と言つてしまへば、それつきりであるが、しかし、一般にあつさり言はれてゐる心、恋、といふ言葉に依つてあらはされる心理よりは、このお爺さんの気持は、はるかに侘しいものであるかも知れない。

お爺さんはなぜ「執拗な積極性」を持つようになったのか。作者は、「一般にあつさり言はれてゐる心、恋」という心理より、「はるかに侘しいものであるかも知れない」と強調している。すなわち、お爺さんが「積極性」を持つようになったのは、お爺さんの舌切雀に対する強い愛情というより、雀がいなくなったことで生じた

「侘しい」気持ちゆえであったということだろう。何か欠ける侘しさが理由であったことに注意しておきたい。さて、「がむしやらの情熱」を持って雀を探し廻るお爺さんは、竹に積もっていた大きい雪のかたまりに頭を打たれ気を失う。「夢幻の境のうち」のお爺さんに「さまたまの声の囁きが聞えて来る」が、それは雀たちの会話である。この悲劇の事件について雀たちは次のように語る。

「悪いおかみさんではないんだけど、あの日は虫のどころがへんだつたのでせう、いきなり、お照さんの舌をひきむしつてしまつたの。」

(略)

「やきもちだらう。おれもこのひとの家の事はよく知つてゐるけれど、どうもこのひとは、おかみさんを馬鹿にしすぎてゐたよ。(略)それをまたお照さんはいいことにして、いやにこの旦那といちやついてゐたからね。まあ、みんな悪い。ほつて置け。」

(略)

「このひとがお照さんを捜してゐるといふ事を言つて聞かせてあげても、藪のあの奥で寝たまま、ぼろぼろ涙を流してゐるばかりなのよ。このひとも可哀想だけれども、お照さんだつて、そりや可哀想よ。」

ね、あたしたちの力で何とかしてあげませうよ。」

「おれは、いやだ。おれはどうも色恋の沙汰には同情を持ってないたちでねえ。」

「色恋ぢやないわ。あなたには、わからない。ね、みなさん、何とかして逢はせてあげたいものだわねえ。こんな事は、理窟ぢやないんですもの。」

「さうとも、さうとも。おれが引受けた。なに、わけはない。神さまにたのむんだ。理窟抜きで、なんとかして他の者のために尽してやりたいと思つた時には、神さまにたのむが一ばんいいのだ。おれのおやぢがいつかさう言つて教へてくれた。そんな時には神さまは、どんな事でも叶へて下さるさうだ。まあ、みんな、ちよつとここで待つてゐてくれ。おれはこれから、鎮守の森の神さまにたのんで来るから。」

この会話を見ると、雀たちは、お照さんの舌を抜いた残酷なお婆さんを「悪いおかみさんではないんだけれど」というように、悪と決めつけない。また、やきもちを焼かせることになつたお爺さんやお照さんにも落度があると言ひ争ひをしていたが、結局は誰がいいか悪いかは断定せず、「理窟抜き」で、お爺さんとお照さんを会わせようと力を合わせるのである。そういうえば、「舌切

雀」の冒頭には、次のような語りがあつた。

ギリシヤ神話に於いて、最も佞悪醜穢の魔物は、やはりあの万蛇頭のメデウサであらう。(略)このメデウサの姿をひとめ見た者は、何とも知れずいやな氣持になつて、さうして、心臓が凍り、からだ全体つめたい石になつたといふ。恐怖といふよりは、不快感である。人の肉体よりも、人の心に害を加へる。(略)それに較べると、日本の化物は単純で、さうして愛嬌がある。古寺の大入道や一本足の傘の化物などは、たいてい酒飲みの豪傑のために無邪気な舞ひをごろんに入れて以て豪傑の乙夜丑満の無聊を慰めてくれるだけのものである。また、絵本の鬼ヶ島の鬼たちも、図体ばかり大きくて、猿に鼻など引搔かれ、あつ！と言つてひつくりかへつて降参したりしてゐる。一向におそろしくも何とも無い。善良な性格のもののやうにさへ思はれる。

作者は、西洋の魔物は「人の肉体よりも、人の心に害を加へる」ようなおぞましい存在であるのに対し、日本の魔物は人情味のある「善良な性格のもののやうにさへ思はれる」と言う。日本では、西洋とは違って、善悪の落差が少くないと言ひたいようである。このような作者の

考えが、雀たちの会話からも見て取れると言えよう。善悪を明確にせず、可哀想だと同情し、助けてあげるのが日本的な物語なのである。このように日本の物語を西洋の物語と対比して語る作者の姿勢は、「浦島さん」にも見られる。

可愛そうに思った他の雀たちのおかげでお爺さんはやがて雀の宿の世界に入り、舌切雀に会う。

お照さんは小さい赤い絹布団を掛けて寝てゐた。

お鈴さんよりも、さらに上品な美しいお人形さんで、少し顔色が青かった。大きい眼でお爺さんの顔をじつと見つめて、さうして、ぼろぼろと涙を流した。

お爺さんはその枕元にあぐらをかいて座つて、何も言はず、庭を走り流れる清水を見てゐる。お鈴さんは、そつと席をはづした。

何も言はなくてもよかつた。お爺さんは、幽かに溜息をついた。憂鬱の溜息ではなかつた。お爺さんは、生れてはじめて心の平安を経験したのだ。そのよろこびが、幽かな溜息となつてあらはれたのである。

この場面でお爺さんは「生れてはじめて心の平安を経験」するのである。「何も言はなくてもよかつた」とい

うのは、日本的な以心伝心のあり方だろう。お鈴さんがお爺さんに「優しいお見舞ひの言葉一つかけるではなし」と言った時に、「優しい言葉だけは、ごめんだ。」とお爺さんが言い、お照さんも笑って肯くの、言葉を使わずに心が通じる理想の関係を示している。このような様子は、お爺さんに優しい言葉を求め続けるお婆さんの姿と対比的である。

お爺さんの積極性が「侘しさ」に発するものである以上、その積極性が舌切雀に会ってから自然になくなるのは当然である。無欲のお爺さんはお土産で「稲の穂」の簪を持って、人間の世界に戻って来る。お爺さんには、舌切雀を探し廻っていたその積極性はなくなり、以前のように書物を黙読するだけになるのである。

二 宰相になるといふ結末について

お爺さんは雀の宿からもらつて来た「稲の穂」の簪を筆立に挿して置いたが、それを見てお婆さんは「おや、それは何です」と聞く。お爺さんが「不思議な経験をありのままに」話した結果、お婆さんは雀の宿に出かけて「大きい葛籠」を持って帰ろうということなる。次はその後の「舌切雀」の重要な論点の一つである結末部分である。

それから、どのやうな事になつたか、筆者も知らない。

たそがれ時、重い大きい葛籠を背負ひ、雪の上に俯伏したまま、お婆さんは冷たくなつてゐた。葛籠が重くて起き上げず、そのまま凍死したものと見える。さうして、葛籠の中には、燦然たる金貨が一ぱいつまつてゐたといふ。

この金貨のおかげかどうか、お爺さんは、のち間もなく仕官して、やがて一国の宰相の地位にまで昇つたといふ。世人はこれを、雀大臣と呼んで、この出世も、かれの往年の雀に対する愛情の結実であるといふ工合ひに取沙汰したが、しかし、お爺さんは、そのやうなお世辞を聞く度毎に、幽かに苦笑して、「いや、女房のおかげです。あれには、苦勞をかけたました。」と言つたさうだ。

この結末は作者が詳細な経緯を語らず、飛躍した形でまとめているため、多様な解釈が行われている。この結末の部分では、二つの疑問が生じる。一つ目はなぜお爺さんは仕官し、宰相の地位まで昇つたのかであり、二つ目はお爺さんがどのようなつもりで「いや、女房のおかげです。あれには、苦勞をかけました。」と言つたかである。

まず、二つ目の疑問について考えてみたい。お爺さんが出世するには、消極的な生き方から積極的な生き方への変化がなければならぬが、それは「女房のおかげ」なのだろうか。越智良二はこの点について次のように述べている。

消極主義から積極主義へ転換したのは、雀との経緯を直接原因としていた。とすれば、彼の仕官も出世も、その原因は雀にこそ帰着すべきであつて、それ以前から続いていたであろうお婆さんの奉仕に帰着すべきではない。⁽⁸⁾

雀との関わりがなく、お婆さんと二人の生活を続けていたら、出世はあり得なかつたと考えれば、たしかに「雀との経緯」が出世の原因だつたとするが、別の考え方も出来よう。雀が行方不明になつた時にお爺さんが積極的になつたのは、舌切雀への「愛情」からというより「侘しい」気持ちからであつた。先にも述べたように「侘しい」気持ちが他人に対する関心を生んだのである。そう考えると、お婆さんが死んだ時、「侘しい」気持ちが生じ、お爺さんを積極的な生き方に変えたと言ふこともできるのではないか。もちろん、お婆さんの死による喪失感や舌切雀のそれとは違ふものであろう。だが、お

爺さんが雀の不在によって生まれて初めての情熱を経験したように、お婆さんの死によっても生まれて初めての何かが湧いて来て、積極的な行動をするようになったと言えるだろう。お婆さんの死による怪しい気持ちは、それまで恐ろしく思い、関わってこなかった世間に向き合うきっかけを与え、それが出世に繋がったと考えられるだろう。そう考えれば、お爺さんは、自分の出世を「雀に対する愛情の結実」とみなす世間の言葉に対し、「いや、女房のおかげです」と言えるのである。

このように考えると、一つ目の疑問、なぜお爺さんは仕官し、宰相の地位まで昇ったのかは、半分までは答えることが出来る。お婆さんのいなくなつた「侘しさ」から、人と関わりたいと思つて、仕官したと答えることが出来るのである。しかし、「宰相の地位」まで昇る必然性については小説内では説明しづらい。お爺さんが長年本を読んで知識を蓄え、無欲だったゆえに、政治家として大成したと考えるのが、お伽斬に相応しい解釈だろうか。ただ、そう考えても、「日本で一ばん駄目な男」が宰相まで出世するという結末は、小説としては不自然と言わざるを得ないのではないかと。

三 「桃太郎」の執筆放棄の問題

次にもう一つ、これまで問題にされてきた「桃太郎」

の執筆放棄の問題を考えてみよう。「舌切雀」の冒頭で、作者は「瘤取り」、「浦島さん」、「カチカチ山」、「桃太郎」、「舌切雀」を書いて、この『お伽草紙』を完成するつもりであったが、「桃太郎」の執筆は放棄したと言ふ。

もちろん私も当初に於いては、この桃太郎をも、私の物語に鑄造し直すつもりでゐた。すなはち私は、あの鬼ヶ島の鬼といふものに、或る種の憎むべき性格を附与してやらうと思つてゐた。どうしてもあれは、征伐せずには置けぬ醜怪極悪無類の人間として、描写するつもりであつた。それに依つて桃太郎の鬼征伐も大いに読者諸君の共鳴を呼び起し、而してその戦闘も読む者の手に汗を握らせるほどの真に危機一髪のものたらしめようとたくらんでゐた。

桃太郎は、昭和一八年に公開された『桃太郎の海鷲』と、昭和二〇年に公開された『桃太郎海の神兵』の漫画映画で戦時下の勇ましい人物として描かれていた。明言はしていないが、作者は、当初「桃太郎」を対米英戦争を思わせるように書くつもりだった、と言っているわけである。松本健一はこの点について次のように述べている。

昭和十年代というのは、(戦争とファシズム)の国家体制が、その軍国化と侵略(海外征伐)のイデオロギーを、桃太郎の鬼退治物語に託してみずから語っていた時期にほかならない。とすれば太宰の桃太郎物語を書かないという決断は、桃太郎物語に託されていたその国家体制のイデオロギーを婉曲に否定していたことになりはしないか。¹⁰⁾

松本は「桃太郎」の放棄を当時の侵略戦争に対する婉曲な批判として取っており、多くの先行研究でも、この「桃太郎」の執筆放棄を「(戦争とファシズム)の国家体制」への批判として捉えている。しかし、「桃太郎」の執筆を放棄したことだけで、「国家体制のイデオロギー」に対する批判と見るのは、『お伽草紙』を全体的に考えた時、拡大しすぎた解釈のように思われる。戦記文学風のものを書きたくないということと、戦争に批判的であることとは別に考えられるべきであろう。

作者は、戦記文学風の「桃太郎」ではなく、自分の身に合わせた、「小さい時から泣虫で、からだが弱くて、はにかみ屋で、さつぱり駄目な男」に設定した「私の桃太郎」を書こうとしたが、それも放棄した理由を次のように述べている。

いよいよこの、「私の桃太郎」に取りかからうとして、突然、ひどく物憂い気持ちに襲はれたのである。せめて、桃太郎の物語一つだけは、このままの単純な形で残して置きたい。これは、もう物語ではない。昔から日本人全部に歌ひ継がれて来た日本の詩である。物語の筋にどんな矛盾があつたつて、かまはぬ。この詩の平明闊達な気分を、いまさら、いぢくり廻すのは、日本に対してすまぬ。いやしくも桃太郎は、日本一といふ旗を持つてゐる男である。日本一はおろか日本二も三も経験せぬ作者が、そんな日本一の快男子を描写できる筈が無い。私は桃太郎のあの「日本一」の旗を思ひ浮べるに及んで、潔く「私の桃太郎物語」の計画を放棄したのである。

作者は、日本人に歌ひ継がれてきた「桃太郎」物語を、主人公を弱い、駄目な人物として Casting することは「日本に対してすまぬ」と言う。「桃太郎」を弱い、駄目な男に設定したところで検閲にかかるとはならないだろうが、「桃太郎の物語」一つだけは、このままの単純な形で残して置きたい」という作者の言をそのままに取れば、「桃太郎」のパロディは不敬に近いという感覚を持つていようである。「物語の筋にどんな矛盾があつたつて」と言うところを見ると、作者は鬼退治が侵略戦争的なイデ

オロギーを持っていることに気づいているようだが、少なくとも「桃太郎」物語を批判する気はないと思われる。とすれば、執筆放棄を言明することをもって、「国家体制のイデオロギーを婉曲に否定していた」とは言い難いのである。

「桃太郎」の執筆を放棄したのは、作者の言に素直に従えば、「日本一」の桃太郎を書くことが、自分の『お伽草紙』に合わないと思ったことが最大の理由であろう。では、『お伽草紙』で作者は何を書きたかったのだろうか。

この私の「お伽草紙」に出て来る者は、日本一でも二でも三でも無いし、また、所謂「代表的人物」でも無い。これはただ、太宰といふ作家がその愚かな経験と貧弱な空想を以て創造した極めて凡庸の人物たちばかりである。(略)私は日本を大事にしてゐる。それは言ふまでも無い事だが、それゆゑ、私は日本一の桃太郎を描写する事は避け、また、他の諸人物の決して日本一ではない所以をもくどくどと述べて来たのだ。

作者が言わんとするところを推測すれば、「極めて凡庸の人物たち」を書くことを通して、日本の庶民的な

りかたを書きたかったということだろうか。国家が理想とする勇ましく英雄的な人物ではなく、普通に生活している日本の国民たちの姿を書きたかったということだろう。別のところで論じたが、「浦島さん」、「カチカチ山」には、西洋と日本の文化を対比させて書かれている所がある。⁽¹⁾西洋の合理主義や善悪をはっきりさせる文化とは違って、日本は善悪を曖昧にして人情を大事にする文化だというのが作者の考えであった。とすれば、「桃太郎」を書かなかったからと言って、国策に批判的であったとは言えず、太宰は太宰なりの方法で、西洋の文化を批判し、日本の文化の優秀性を強調して、国策に協力していると言えるのである。

まとめ

『お伽草紙』全体を通してみると、「瘤取り」では、傑作意識で悩んでいた太宰治が、純文学より大衆文学的なものに価値を見いだしていることが窺える。⁽²⁾太宰は、戦争に直接役に立たず、価値のないと思われるような人々を慰め、楽しませる文学を選んだと言えるだろう。「浦島さん」、「カチカチ山」には、アメリカあるいは西洋の文化を批判する意図が窺える。「浦島さん」は、科学的で合理的で理性を重視する西洋の二分法的な思考から抜け出し、人情のある日本の物語として完成させた作

品である。「カチカチ山」では、アメリカ的な「青春の純真」を批判している。最後の「舌切雀」でも善悪をはっきりさせず、理屈では無く行動する文化への共感が見て取れる。これらに通底するのは、日本文化を称揚しようとする姿勢である。

また、『お伽草紙』の四つの作品の中には、それぞれ具体的な日本の地名が言及されている。「瘤取り」には「このお爺さんは、四国の阿波、剣山のふもとに住んでゐたのである」とあり、「浦島さん」には「浦島太郎といふ人は、丹後の水江とかいふところに実在してゐたやうである。丹後といへば、いまの京都府の北部である」とある。「カチカチ山」には「これは甲州、富士五湖の一つの河口湖畔、いまの船津の裏山あたりで行はれた事件であるといふ」とあり、「舌切雀」には「ここは東北の仙台郊外、愛宕山の麓、広瀬川の急流に臨んだ大竹藪の中である」とあり、その地方に対する説明も加えている。本来、これらの話は特定の地域にだけ伝わる話ではないのだが、地域を具体的に記述したのは、『新釈諸国噺』同様、それぞれの地域の人々を楽しませるつもりがあったのだろう。

『お伽草紙』は、「舌切雀」の冒頭にあるように、「日本の国難打開のために敢闘してゐる人々の寸暇に於ける慰勞」という意図で書かれたと言える。英雄的な活躍は

出来ない駄目な人間への応援歌のようなものでもあり、その意味では戦争協力的な作品と言えるのだが、しかし、そこで讚美する日本の文化は、武張った文化ではなく、人情を大事にする文化であった。太宰の戦争協力はそのような性格を持つものであったと言えるよう。

【注】

- (1) 安田義明「太宰治『お伽草紙』論——「舌切雀」の読みを中心にして」『滝川国文』17号、二〇〇一年
- (2) 越智良二「太宰治「舌切雀」管見」『愛媛国文と教育』、一九九〇年十二月
- (3) 巖大漢「太宰治『舌切雀』小論——『桃太郎』パロディー放棄の理由と『後日談』の解釈について——」『上越教育大学国語研究』、二〇〇四年二月
- (4) (1)に同じ。
- (5) 高田知波「除外のストラテジー——太宰治『お伽草紙』論への一視角——」『駒澤国文』、一九九五年二月
- (6) 拙論「太宰治「浦島さん」論——日本と西洋の対比を中心に——」『中央大学国文』、二〇一九年三月を参照のこと。
- (7) 巖大漢は(3)と同じ論文で、「やがて雀の宿でお照と対面し、そこで体験することとなる「生まれてはじめての心の平安」は、言葉を紹介しなくても分かり合える理想的な人間関係をお爺さんに体験させたもので、現実

主義者のお婆さんがお爺さんに求めた「優しい言葉」によって愛情を確認しようとする現実世界におけるそれと対比される」と述べている。

(8) (2)と同じ。

(9) 敵大漢は(3)と同じ論文で、「桃太郎のイメージは、たとえば、中国戦線の空軍部隊の隊員を桃太郎に見立てて紹介した昭和十六年八月二十日付『朝日新聞』の『空の桃太郎』お供に犬と猿」と題する記事や、海軍省の後援を得て制作された漫画映画『桃太郎の海鷲』(昭和十八年、芸術映画社)、あるいは『桃太郎海の神兵』(昭和二十年、松竹)など、軍扇の格好の素材として利用されていた」と述べている。

(10) 松本健一「民族的エトスの陥穽」(『太宰治とその時代 含羞のひと』一九八二年六月、第三文明社)

(11) (6)と同じ論文と、拙論「太宰治「カチカチ山」論——語り手のスタンスを中心に——」(『中央大学国文』、二〇二〇年三月)を参照のこと。

(12) 拙論「太宰治「瘤取り」論——戦時下の文学観を中心に——」(『中央大学国文』、二〇一八年三月)を参照のこと。

(シン) ソルファ 本学大学院博士前期課程平成二八年度修了)